

揖保川流域の禅院と石見守護代所

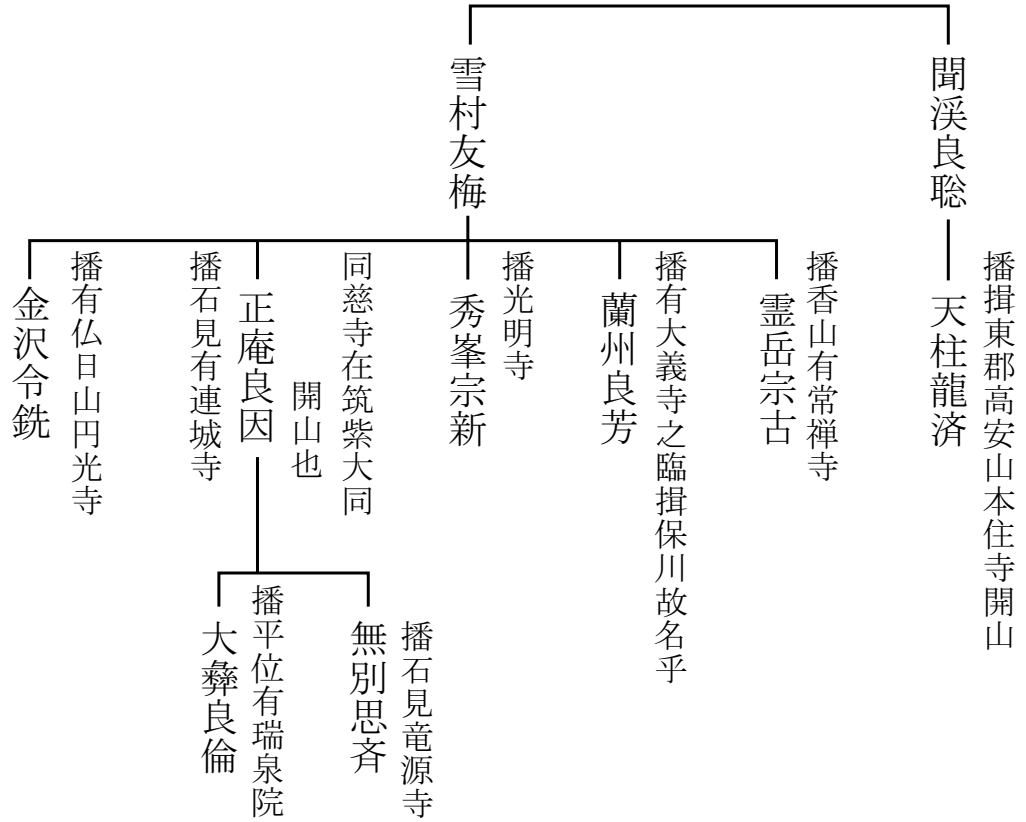
大村 拓生

はじめに

室町期の播磨守護赤松氏が禅宗寺院を篤く保護していたことは、高坂好氏の研究^①によって広く知られるようになった。しかし未だ明らかになっていないことも多く、基礎的な事実を積み重ねていく研究段階にとどまっております、ひようご歴史研究室でも関連する禅宗史料の収集作業を開始している。本稿はその中間報告の一つとして、建仁寺両足院蔵「本邦禅林宗派」一山派法系図に記された寺院について、関連史料および現地調査の成果を踏まえて網羅的に検証するとともに、そこに登場する石見について、応永期に東寺領矢野荘に人夫役などを課していた石見守護代所の存在形態および立地とあわせて再検討するものである。

一 「本邦禅林宗派」にみえる播磨の禅院

建仁寺両足院蔵「本邦禅林宗派」は元龜元年（二五七〇）二月二十八日の奥書を持つ禅宗法系図で、建仁寺如是院の春沢永恩が撰述したとされる。また僧名には個々が関わった寺院のことなどが、江戸末期の建仁寺両足院塔主高峰東峻によって書き込まれている。このうち一山派の部分全てを筆者が翻刻し、『播磨新宮町史料編Ⅰ』^②中世史料一・二八として刊行されている。全文はそちらを参照願うとして、一山の弟子のうち播磨の禅院について注記されている部分のみを（フリガナ、一・二点は省略）、僧名（拠点とした寺院名が記されている場合があるが省略）とともに抜き書きしたのが次の図である。守護代所とあわせて取り上げる石見の二ヶ寺以外について、以下で検証してゆきたい。



①本住寺。注記から揖東郡に立地し天柱龍濟を開山としてゐることがわかるが、創建の経緯については不明である。法隆寺領鵜荘内に立地しており、

関連史料が石田善人氏によつて『太子町史』第三卷^③に集成されている。寛文八年（一六六八）「当寺堂塔寺院之図」^④によると斑鳩寺本寺北側の子院群が描かれ、その北に「本住寺」と書き込みがあり、明治六年（一八七三）「播磨国揖東郡鵜村絵図」では当該部分が「官藪」と記されており、位置が確認できる。

応永三四年（一四二七）八月二十九日「法隆寺五師所下知状案」^⑤によると、「鵜庄本住寺同寺領以下事」について鵜荘が寺家一円領で、本住寺は買得によつて建立されたことを確認した上で、住持の讓状を認め知行を認めるとともに、本所の年貢・公事の沙汰を求めている。ここから鵜荘内に寺領を有していたことがわかり、大永五年（一五二五）になつても本住寺の本寺と考えられる建仁寺大昌院に段錢二十貫文が支払われていることが確認できる^⑥。大昌院は鵜荘の東に隣接する太田荘を領有する三条西実隆に對して、本住寺を介して収納の取り次ぎをおこなつており^⑦、都鄙の禅宗寺院のネットワークが莊園制支配を補完する役割を果たしていたことがわかる。

その一方で鶴荘を構成する寺庵の一つとして扱われ、法隆寺から下向してきた代官から下向時に雑紙一束・百扇一本・草履一足、百姓が進上した上柿一連・輿米三合といった、種々の下行を西光寺（浄土真宗）・大通庵（不明）などの寺院、新・山下などの有力者とともに受ける存在であった。⁸⁾

また永正十一年（一五一四）八月一日には干ばつのため小宅荘と鶴荘の分水である横井で、小宅荘側が違乱を行い番衆が取り囲まれたため、斑鳩寺の鐘が鳴らされ鶴荘から一二〇〇人が駆けつけその後も用水相論が続くが、その際の番衆が本住寺と山下左京亮だった。⁹⁾ これらから本住寺が鶴荘の単なる外部の存在ではなく、その有力な構成員として地域社会で活動していたことも知られる。都鄙間交通の結節点と地域社会の有力構成員というこの二側面が、当該期の禅院の有する役割であったことを確認しておきたい。

②常禅寺。原史料には香山に「カウヤマ」というフリガナがあり、新宮町香山に立地していた城禅寺を指している。¹⁰⁾ 城禅寺開山の霊岳宗古は渡元経験を有し、播磨守護赤松則祐に迎えられ城山城の

鬼門に鎮護のため創建され、永禄八年（一五六五）までは存続が確認できるが、その後には廃寺となった。ただし慶長一〇年（一六〇五）に創建された臨濟宗妙心寺派の梅岳寺（新宮町宮内に立地）には城禅寺から移されたという仏像と、霊岳の開山塔とされる室町初期の無縫塔が残されている。また応安二年（一三六九）に霊岳が天神（菅原道真）の感得をうけたことがきっかけで、天満天神社が創建され現存している。

③大義寺。開山の蘭州良芳の事蹟を記した「弘宗定智禅師行状」¹¹⁾によると、延文元年（一三五六）に播磨守護赤松則祐に迎えられ、寄進された「上岡郷内北山并荒野」に伽藍が営まれた。上岡郷の郷主喜多野氏は当初は新田義貞に属していたが、後に蘭州を頼って赦免され、「赤松一家安全」を祈願して大義寺と金剛寺が蘭州の門葉の寺院として建立された。喜多野氏はもともと北野と表記されていたが、康安元年（一三六一）の南朝京都侵攻の際に、春王（後の足利義満）が建仁寺大龍庵に避難し匿った塔主蘭州が、北野義綱に託して下向させたという功績により、義の編諱を受けると

ともに喜多野に改めさせたとされ¹²、室町期には赤松氏の在京奉行の一人として活動した¹³。なお諸史料では春王は白旗城に滞在していたとされるが、蘭州と喜多野氏との関わりを考えると、少なくとも当初は大義寺にいた可能性が高いと考えられる。

大義寺は『兵庫県の地名II』¹⁴によると、神岡町大住寺の大源寺が故地に当たり、嘉吉の乱で焼失したが、天文二年（一五三三）皿池築堤工事の際に阿弥陀如来像が出土し、龍野如来寺の本尊とされたという。「本邦禅林宗派」には揖保川に臨むとあり、大源寺鶴嘴山には天然記念物屏風岩があり、城山城も対岸に観ることができるとある。また揖保川に面して文和三年（一三五四）の年紀を有する磨崖地藏立像（髯崎磨崖仏）が造立されており、鎌倉後期には浄土信仰が広まっていた¹⁵。

また大義寺と並んで見える金剛寺は、「峯相記」によると正和年間（一一三二〜一七一七）に仙覚上座が「上岡山崎」に建立したとし、「摺拾集」¹⁶では東福寺円爾弁円門下の月船琛海が書写山で活動し、その弟子である仙光房了果が塔所正覚院を書写山内に建立するとともに、「神岡金剛寺」の開山に

なつたとされる。何れとも決めがたいが、『五山禅林宗派図』¹⁸にみえる月船の弟子七名のうち六名の法諱が了を系字としており、そこに見えない了果も月船の門下であったことは確実だろう。鎌倉期の播磨国への禅宗の進出は東福寺派が先行していたことが知られ¹⁹、その後には赤松氏の外護のもと一山派とりわけ雪村派が進出していったもので、金剛寺にもその影響力が及ぶようになったものと思われる。

金剛寺の故地ははっきりしないが、明徳元年（一二三〇）九月に喜多野義綱が書写山の僧鎮増に「上岡ノ八幡宮」で法華経の談義を所望し、宿坊とされたのが金剛寺だったことが知られる²⁰。八幡宮は現在の榎八幡神社のことで、大義寺の立地した大源寺鶴嘴山から平地を挟んだ南側の丘陵に立地しており、金剛寺もその付近にあったものと思われる。

このように鎌倉後期に浄土信仰、東福寺派が入り込んでいた宗教環境に、喜多野氏に外護された雪村派の寺院が進出していったといえる。また髯崎を含む中世には越部下荘と呼ばれていた地域の

鎮守は、暦応元年（一三三八）に足利尊氏の命で勸請されたという六条八幡神社で、喜多野氏の名前こそみえないが、支配勢力の転換が背景となった由緒だと思われる。

④光明寺。日本歴史地名大系で一四世紀に存在していたと思われる播磨国の光明寺を検索すると、観応の擾乱で足利兄弟の合戦の舞台となった真言宗寺院（滝野町）、「峯相記」にみえる雲大夫入道が飾磨津に建立した浄土堂、空海建立の由緒を有する黒沢山（赤穂市）、旧上月町金屋にある中世寺院跡に建つ小堂、佐用町平福にある行基開創と伝える真言宗御室派寺院、保延四年（一一三八）播磨国在庁官人桑原貞助がおこなった大般若経頓写事業にみえる「穴栗高家郷光明寺」が確認できる。宗派から限定すると残るのは金屋のもので、禅宗寺院の円応寺・円光寺などとも近接しているのが注目されるが、それ以上の積極的な根拠を得ることはできなかつた。

⑤同慈寺。永徳二年（一三八二）八月六日「播磨国弘山莊実検絵図写」²¹に「大道」と記され、龍野町大道がその故地だと考えられる。あるいは導慈

寺・道慈寺などの可能性もあるが、何れにせよ明確な手がかりを得ることはできなかつた。

⑥円光寺。旧上月町円光寺にかつて存在していた。建武元年（一三三四）八月二二日に赤松円心が時藤名を管領して円光寺の興隆を専らにするよう命じた宛所不詳の文書が初見史料となる。²²佐用町円応寺にかつてあり暦応初年（一三三八）に開山され後に諸山に列せられた円応寺の住持は東福寺派の太朴玄素であることから、円光寺も鎌倉後期に東福寺派によって開山された可能性が高く、それが金沢令銃の入寺により雪村派に転換したのではないか。文正元年（一四六六）に「円光寺藤首座」が宝林寺宝渚庵の塔主となり、京都相国寺の季瓊真薬のもとを訪れ「円光寺大勝西堂」が八六歳であることを話題にしている。²³「本邦禅林宗派」から大勝西堂が金沢令銃からみて法孫にあたる大勝宗縁、藤首座が大勝の法嗣としてみえる春芳彦藤であることが確認でき、円光寺が金沢の法系によって継承されていたことが判明する。金沢・大勝には「宝林」という記載もあり、赤松則祐が雪村友梅を開山として建立した宝林寺を頂点としたネッ

トワークのもとで、文正という嘉吉の乱で赤松氏が一度滅亡した山名氏の守護支配期においてもその活動が継続していたことが確認される。

さらに円光寺については考古学的な知見を得ることができ⁽²⁴⁾。東端を頂点とする三角形の南北約七〇m・東西六〇mの平坦面の西端部分でおこなわれた円光寺遺跡の調査では、一四世紀から近世初頭にいたる多数の瓦・土器が出土し、軒平瓦には「佛日山」と記されていたという。同所には明治初期まで「佛日庵」という宗教施設が存続したとのことだが、「本邦禅林宗派」によりこれが円光寺の山号であったことが確認でき、一六世紀まで補修されながら存続していたことが明らかに⁽²⁵⁾なった。また高台に位置する円光寺遺跡が見下ろす佐用川が蛇行する低地の平瀬遺跡からは中世の遺構・遺物が出土し、特に一四世紀以後は稠密な建物群が街村状の集落・川岸集落の二ヶ所で検出され、遺物も中国産青磁碗・瀬戸焼などを含む量・器種ともにバラエティーに富むものだったという。円光寺の造営を契機に地域流通が活性化した結果だと評価されており、当該期の禅院が地域社会に

果たした役割を考える上で大変興味深い成果だといえる。

⑦瑞泉院。室町期に大徳寺徳禅寺領だった平位荘に立地したことがわかる。文明一四年（一四八二）五月七日「平位荘領家方井河池修理支配状并納帳」⁽²⁵⁾では井河池修理について四一文が瑞泉院夏地子から立用されており、除分として恩徳寺・慶福寺などの名前が、秘計として中氏方・山本方などの名前が見える。延徳三年（一四九一）正月一六日「平位荘領家右方分帳」⁽²⁶⁾の地主と思われる部分に、瑞泉院・山本分・中殿分・景雲寺などの名前を確認することができる。

このうち恩徳寺は「峯相記」にみえる徳道開基伝承を有する真言宗寺院で揖西町中垣内に存在し、近世に再興された際に浄土宗に改宗したという。慶福寺も「峯相記」にみえ、「永明門徒明欽上座」が平位荘に隣接する「桑原」に建立したとある。永明庵は東福寺蔵山順空の塔頭で東福寺派の禅宗寺院だったことが確かめられる。景雲寺（慶雲寺）も揖西町中垣内に所在する藤原惺窩も幼少期に学んだ禅宗寺院で、近世には相国寺末寺だったが明

治に廃寺になったという。平位莊関係史料にみえる瑞泉院が、これらの諸寺と並び同地に存在した雪村派の禅宗寺院を指すことは疑いない。また土地台帳への表れ方は、法隆寺領鶴莊の本住寺と同様で、都鄙を結ぶとともに地域の有力構成員として存在していたことが想定される。

二 石見守護代所と雪村派寺院

残るは石見の二ヶ寺だが、その前に東寺領矢野莊関係文書にみえる石見守護代所の概要についてまず確認しておきたい。⁽²⁷⁾

矢野莊で作成された散用状を通覧すると、坂本および守護代（もしくは地名）から賦課されていることが確認できるが、「広瀬」と明記されているのは応永四年（一三九七）一〇月一五日で一旦の終見を迎える。⁽²⁸⁾ 続く応永五年分では「守護代」とのみしか記されていないが（五八八）、一二月一〇日分にみえる「守護代方長田」が、応永一六年閏三月二〇日に支出されている「石見津間方聳之長田円寂之時振舞」（六六五―一）と同一人物だと

みなすと、応永五年段階で守護代が交代している可能性が高い。同年九月二三日に支出されている「守護代ヨリ壁柱十本被懸使雑事・引出物」といった屋形の造営に関わると考えられる負担も前年までの広瀬への負担にはみられない。

造営関連の課役はその後も「守護代ヨリ坪柱催促之使節酒直」（五九七―一）・「守護代方ヨリ材木持之使雑事」（六一〇―一）など断続的に続き、応永九年五月二〇日に「岩見之守護代方ヨリ京上夫一人夫賃」（六二二―一）と「岩見」という表現がはじめて登場する。ただし同年の他の賦課や翌応永一〇年分（六三二―一）では「守護代方」で、この段階では統一されてはいない。それが応永一一年八月二三日では「石見殿より材木ノ夫十人被懸時、使一宿雑事」（六三〇―一）と呼称され、以後は「石見殿」・「石見方」・「石見」となり「守護代」という表現がみえなくなる。同年からはそれ以前にはなかった薪の賦課もしばしば見られるようになり、守護代の日常生活に関する負担も課せられるようになった。

また早くは応永七年に「守護代方御さうし岩屋

参詣之時雜掌」(六〇三―)が賦課されているが、前述した応永一六年の「石見津間方聳之長田円寂之時振舞」を皮切りに、応永一七年二月一七日「石見ヨリ次郎御曹子下向用意、御薪十荷催促使一宿」・九月八日「石見御曹子当所於大僻宮之スマイ見物之時、振舞候了」(六七〇)、応永一八年四月二〇日「石見殿御タイ御他界之時、一献分、同奉行津間方マテ」(六七五)といった関係者の弔事や子息の行事への支出もみられるようになる。応永一七年六月一二日には「坂本小河新左衛門入道親父恒内他界之時、訪一献分、国中加様ニ悉候間、致沙汰候了」(六七二―)と坂本への支出もあり、これは偶然に弔事が重なったというより、「国中加様ニ悉」とあるように守護支配の重みが一国レベルで自覚されるようになったことを受けての、代官側の主体的判断によるものと考えられる。

たことがわかるが、翌応永一九年四月二七日に「石見之守護方始タル間、礼申時、屋形一結・律方方五連・八木小四郎三連」(六八一)とあり、引き続き石見で守護代で活動した。こちらは赤松肥前守に比定されており、下野入道との関係はわからないが奉行津間が引き継がれていることから、通常の代替わりと見なすことができる。さらに応永二四年正月一二日には「岩見殿年始為御礼、一献分」「同御内両奉行佐野・八木二一献」(七〇〇―)が支出されてからは、守護代と両奉行への年始礼も恒例化する。応永二八年には「石見守護代方大事ニ久違例候間、国中サワキ候て、人々各御礼被申候間、其時罷出候間、一献分沙汰仕候」・「同奉行ニモ振舞候畢」(七二六―)とあり、守護代の重病が「国中サワキ」となるほど影響力を有していたことがわかる。

しかし応永二九年の年始礼と、四月一日の「石見、京上夫二人被懸候」を経て、五月一三日に「広瀬方守護代被持候間、寺社本所より礼ニ候間、為其、一献分」「同両奉行内海・山下二一献分」(七二九)とあり、広瀬に守護代所が遷ったことが

わかる。同年の石見への年始礼の対象となった両奉行は佐野と八木で、全く引き継がれておらず肥前守死去による単なる代替わりとみなすことはできない。唐突すぎる展開で何らかの政変の存在も想定されるが、散用状は黙して語らない。

このように応永五年から二九年四月まで二五年にわたって存在が確認できる石見守護代所だが、その位置については長らく御津町岩見に比定されてきた。それに対して小林基伸氏は、石見は近代になって片村・稲富村・伊津村が合併してできた村名で必ずしも適当ではなく、国衙領石見郷（太子町）の可能性も否定できないとしながら、石見荘内のどこかにあったとする。ただし石見荘は合併した三村と隣接する山田村をあわせた地域に比定されており、大きく変わるわけではない。

しかし石見郷の可能性は想定できないであろうか。その点で注目されるのが、赤松肥前守段階の応永二〇年一〇月二六日に賦課された「石見方より龍源寺地福栗柱人夫・杣人以下食料」（六八七一）である。この龍源寺が「本邦禅林宗派」で無別思斎に注記される「石見竜源寺」に当たること

は疑いなかろう。この龍源寺については別の史料があり、高坂好氏以来の研究がある。嘉吉の乱で一度滅亡した赤松氏が再興を認められた後に、幼少の赤松政則を擁して播磨回復にもっとも功績があったのが赤松下野守政秀で、文明一二年（一四八〇）三月に龍源寺において、一山派天柱龍濟の法嗣である天隠龍沢と守護赤松政則を招き逆修の法会を執り行っているのである。³⁰この赤松政秀は後の系図類には名前がみえないが、赤松則祐の「六世之孫」とされ、³¹現在は官途から石見守護代赤松下野入道の系譜をひくと考えられており、文明期には塩屋城主、後に龍野赤松氏として秀吉の播磨攻めまで地域権力として存続する一流である。

そこで龍源寺だが、高坂好氏は姫路市網干区浜田に所在する永正一四年（一五一七）創建の同名の浄土真宗寺院に比定し、それが現在まで引き継がれている。しかしそれを継承する小林基伸氏も浜田は塩屋荘に含まれていたとし、石見とする「本邦禅林宗派」とは相違している。また北陸の中世港町における寺院の立地を概観した仁木宏氏は、室町時代に成立した禅宗寺院は比較的安定し

た地形上に立地し、戦国に進出した浄土真宗寺院は砂堆・砂州上の縁辺部に位置することが多いとする。浜田は揖保川対岸の余子浜・興浜と異なり、室町期には地名としての徴証が確認できない海浜部最前線の砂堆で、しかも龍源寺は近世室津海道が通る微高地上ではなく、その縁辺部に立地している。そのような場所に室町期段階で禅宗寺院の伽藍が立地していたとは考えがたい。高坂氏は天隠龍沢の「龍源寺文溪禪師像贊」³⁴に「龍源元是大龍宮」とあるのを、「大龍宮という語は、龍源寺が海近くに建っているので龍宮にかけたものでありましょうが、縁語としては建仁寺の中に赤松円心が師の雪村友梅禪師のために建てたといわれる大龍庵のことをかいた」と解釈するが、前半部分に大きな根拠があるとは思えず、当時の龍源寺住職と親しくしているため調べてもらったが特に手がかりは得られなかったという。

そこで注目されるのが近世岩見郷の産土神石海神社の氏子圏に含まれる太子町福地にある浄土真宗寺院の安養山了源寺である。ここについても由緒は確認できなかったが、次頁に掲げた「太子町

小字図」³⁵をみると福地の北側の老原には了源寺山という小字が残り、その南側には門前という小字がある。かつてその付近に龍源寺があり、その名前の音のみが了源寺に継承されている可能性が考えられないだろうか。なお龍源寺文溪禪師は赤松政秀の兄で、『五山禅林宗派図』によると雪村法嗣の一人太清宗謂の弟子に文溪の名前があり、天隠に文溪像の贊を求めた法弟祖芳宗知の名前も確認することができる。円光寺のように直系ではないが、雪村派の法系によって龍源寺が継承されていったことが確認できる。

ところで「本邦禅林宗派」には龍源寺開山の無別思斎の師正庵良因と関わって、石見に連城寺という寺院の存在が記され、世代的には赤松下野入道が関与した可能性が高い。これについては史料もなく立地も不明だが、福地の西側に同じく石海神社の氏子圏に含まれ音が通じる蓮常寺という大字があり、大門・圓蔵坊といった小字も存在する。蓮常寺にある浄土真宗寺院弘誓山教興寺内の石碑に拠ると、天平八年（七三六）に徳道上人によって蓮常寺が建立され真言宗に属したが、天文元年

がわかる事例がある。石見には正月礼が実施できるような儀礼空間や、奉行人の政務の場などをもつ、方形館規模の守護代館が営まれていたはずで、その有力な比定地と考えられる。

このように石見郷には、守護代所、その外護による連城寺・龍源寺といった禅宗寺院が建ち並ぶ空間を復元することができるのである。石見郷は国衙別納の一つとして持明院統に伝領され、守護代所が存続している応永二三年（一四一六）一月二一日には伏見宮貞成親王が亡父栄仁親王の菩提料所として大光明寺に寄進し（『看聞日記』、翌年二月二三日には在京代官と思われる法輪寺から百ヶ日仏事のため、五百疋が進上されている『同』）。現地の状況は不明ながら、その管理は守護代側が行っていたと思われる。永享一二年（一四四〇）八月二八日「伏見宮御領目録案」³⁶によると、「七千余貫」とあり、単位が疋の誤りだとしても、他の国衙別納である伊和西が二千余疋、市余田が二千三百疋であるのに対して、非常に多額で、高い収益が期待できる所領であったことがわかる。

石見郷の西には林田川が流れ、水運の発達した

揖保川がちょうどその付近で合流し、南側には瀬戸内海交通とつながる余子浜・興浜といった湊があり、ある程度のにらみをきかせることも可能である。東には夢前川を渡河した英賀を経て、古代以来播磨の経済中枢機能を有していた府中へと向かう陸路も機能していたと思われ、北は近世山陽道とほど近い。こうした立地は水陸の交通を直接掌握するほどではないにしろ、一定の影響力を及ぼすことができる点で、一五世紀前半の守護代拠点としてふさわしいものと考えられるのである。

むすびにかえて

断片的な史料を基に憶測を重ねてきたが、揖保川流域の禅宗寺院の立地と、石見守護代所の位置について、それなりの仮説を提示することができたとと思われる。

赤松氏および守護代・家臣らの外護をうけたこれらの禅宗寺院は、雪村派の法系によって住持を継承し、独自の都鄙間ネットワークを有するとともに、地域を形成する有力構成員としての性格を

有し、地域経済の要としての意義も有していた。「拮拾集」には円教寺造営のための材木が、延文五年（一三六〇）に揖保川上流の引原で伐採され、数日かけて下らせた河山（香山）から一夜で横浜（余子浜）に至ったという記事がみられ、近世高瀬舟につながる揖保川水運の存在を示唆している。その香山に立地していたのが城禅寺で、そこから下流部に揖保川水系を臨みながら、禅宗寺院が立地していたことが末尾に載せた地図で明白になる。その最下流部にあたるのが石見で、守護代の権力拠点として応永期には機能していた。これらを総体として見たとき、当該期の赤松氏権力による地域支配についても何らかの示唆が得られるのではないか。

その一方で禅僧のネットワークは嘉吉の乱後の赤松氏滅亡期にも維持されており、赤松氏再興との関係も問われなければならないだろう。復活した赤松政則期の延徳元年（一四八九）にも陣没した將軍足利義尚の供養のため、細川政元が「播州中島保内宝寿禅寺」に銭と経王を寄進していることが知られ、³⁷「本邦禅林宗派」にみえない禅宗寺

院が他にも存在していたと思われる。今後事例の発掘につとめるとともに、その果たした役割について考えていきたい。

- (1) 主著は『赤松円心・満祐』（吉川弘文館、一九七〇年）。ガリ版原稿を含む遺稿が『中世播磨と赤松氏』（臨川書店、一九九一年）に集成され、以下で取り上げる論考は後者に収録。
- (2) 兵庫県新宮町、二〇〇五年。
- (3) 兵庫県太子町、一九八九年。
- (4) 「斑鳩寺記録」甲（『太子町史』第三卷、中世三六、斑鳩寺文書、二五三頁）。同図については、小林基伸「斑鳩寺・政所・稗田社」（『播磨国鶴荘現況調査報告』Ⅱ、太子町教育委員会、一九八九年）参照。
- (5) 「五師所方引付」（『同』、中世三二一、法隆寺文書、四一五頁）。翻刻は「卅六」とあるが、応永三五年四月に正長元年に改元されており、干支が丁未と記されていることを優先して、三四年と判断した。
- (6) 「鶴庄引付」（『同』、中世三五、斑鳩寺文書、二二九頁）。
- (7) 『実隆公記』文龜三年五月四日・永正六年五月二五日条。
- (8) 「鶴御庄当時日記」（『太子町史』第三卷、中世二二八、法隆寺文書、四四一・四五〇頁）。
- (9) 「鶴庄引付」（『同』、中世三五、斑鳩寺文書、二二四頁）。
- (10) 高坂好「城禅寺開山靈岳宗古禅師伝」。城禅寺の関連史料は、前掲『播磨新宮町史史料編Ⅰ』に集成し

- た。以下の叙述については史料一二七解説（二一九頁、大村執筆）による。
- (11) 『続群書類従』九下所収。
- (12) 「喜多野天用性公居士三十二年拈香」（「翠竹真如集」『五山文学新集』五）。これについては早くに高坂好「白旗城と赤松ばやし」・「喜多野氏について」があり、義満からみた近年の研究として、桃崎有一郎「足利義満の首府『北山殿』の理念的位置―北野信仰・明徳の乱・狂言と虚構空間―」（桃崎・山田邦和編『室町政権の首府構想と京都』文理閣、二〇一六年）がある。
- (13) 三宅克広「播磨守護赤松氏奉行人の機能に関する考察」（『古文書研究』二八、一九八七年）。
- (14) 平凡社日本歴史地名大系、一九九九年。ジャパンレヅジ版による全文検索を利用した。以下も簡単な地名・寺院の紹介は同書に拠る。
- (15) 髯崎については、前掲『播磨新宮町史史料編Ⅰ』中世一六四・一六五解説（森田竜雄執筆）を参照。
- (16) 『兵庫県史史料編中世四』寺社縁起類播磨国一、六二頁。
- (17) 『同』寺社縁起類播磨国六、一二八頁。
- (18) 玉村竹二編『五山禅林宗派図』思文閣出版、一九八五年。
- (19) 原田正俊「播磨国における禅宗の発展」（『日本中

世の禅宗と社会』吉川弘文館、一九九八年。

(20) 『鎮増私聞書』（『兵庫県史史料編中世四』寺社縁起類播磨国二六、三〇〇頁）。

(21) 『兵庫県史史料編中世三』円尾文書二。

(22) 猪熊信男氏所蔵文書、『上郡町史』第三卷、中世史料八七。

(23) 『蔭涼軒日録』文正元年閏二月六日条。

(24) 『平瀬遺跡―国道三七三号地域連携推進事業（特改一種）に伴う埋蔵文化財報告書―』兵庫県教育委員会、二〇〇八年。

(25) 『大徳寺文書』二卷六七七号。

(26) 『大徳寺文書』一卷四一三号。

(27) 石見守護代については、岸田裕之「守護赤松氏の播磨国支配の発展と国衙」（『大名領国の構成的展開』吉川弘文館、一九八三年、初出は一九六八年）・伊藤邦彦「室町期播磨守護赤松氏の〈領国〉支配」（『鎌倉幕府守護の基礎的研究【論考編】』岩田書院、二〇一〇年、初出は一九七三年）を嚆矢とする研究があり、『相生市史』第二卷（一九八六年、熱田公執筆部分）・『御津町史』第一卷（二〇〇一年、小林基伸執筆分）など県内の自治体史でも触られており、基本的な経緯についてはすでに明らかにされている。

(28) 応永五年二月一六日「学衆方年貢等散用状」（『相生市史』第八卷上五八六、東寺百合文書ヲ函四三）。

なお煩雑になるため以下では、『相生市史』の文書番号名を本文中に記すのみとする。また学衆方・供僧方のそれぞれの代官が毎年散用状を作成しているため、同じ支出がみられるが、引用は字配りがわかりやすい片方のみを抜き書きした。

(29) 「中世の御津町」（前掲『御津町史』）。以下での小林氏の見解はこれによる。

(30) 「赤松野州前司政秀公逆修頓写法華十三部散忌拈香」（『黙雲稿』（異本）『五山文学新集』五）。ここには「本寺開山無別和尚也」と明記されている。

(31) 「赤松政秀公寿像賛」（『翠竹真如集』二、『五山文学新集』五）。

(32) 高坂好「赤松下野守政秀と赤松氏の播磨回復」二四五～二四七頁。

(33) 仁木「中世港町における寺社・武家・町人―北陸を中心に―」（仁木・綿貫友子編『中世日本海の流通と港町』清文堂、二〇一五年）。

(34) 「翠竹真如集」二（『五山文学新集』五）。

(35) 『太子町史』第四卷付図、一九九〇年。

(36) 「榎戸文書」（村田正志『證註椿葉記』宝文館、一九五四年）。

(37) 『蔭涼軒日録』延徳元年一〇月二一日条。



関連地図 原図は国土地理院1/50000地形図「姫路」・「龍野」